

線形 2 階微分方程式

18/11/26 遠藤雅守

我々は質点の運動に興味があるので、解くべき微分方程式は、典型的には

$$m \frac{d^2 x}{dt^2} = -\gamma \frac{dx}{dt} - kx + F(t) \quad (1)$$

m	質量
γ	抵抗係数
k	ばね定数
$F(t)$	外力

と表される. とする. 話を一般化するため, $\kappa = \frac{\gamma}{m}$, $\omega_0^2 = \frac{k}{m}$, $f = \frac{F}{m}$ と置き換えて,

$$\frac{d^2 x}{dt^2} + 2\kappa \frac{dx}{dt} + \omega_0^2 x = f(t) \quad (2)$$

と書く. まず, 斉次形の一般解を求めよう. 特性方程式は

$$\lambda^2 + 2\kappa\lambda + \omega_0^2 = 0 \quad (3)$$

で, λ は根の公式を使って

$$\lambda_1 = -\kappa + \sqrt{\kappa^2 - \omega_0^2}, \quad \lambda_2 = -\kappa - \sqrt{\kappa^2 - \omega_0^2} \quad (4)$$

である. あとは, 原則的に

$$x(t) = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t} \quad (C_1, C_2 \text{ は任意の定数}) \quad (5)$$

とやっつてしまえば終わりであるが, $\kappa^2 - \omega_0^2$ がゼロにも, 負にもなりうる点に注意が必要だ. そこで, $\kappa^2 - \omega_0^2$ の符号に応じて解法を分ける.

1. $\kappa^2 - \omega_0^2 > 0$

解は素直に

$$x(t) = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t} \quad (C_1, C_2 \text{ は任意の定数}) \quad (6)$$

と表される. すなわち, 2 つの負の指数関数の和となる.

2. $\kappa^2 - \omega_0^2 = 0$

このときは, 指数関数が同じになってしまうので, C_1 と C_2 が合体してしまい, 任意定数が一つになってしまう ($C_1 + C_2$ も任意の定数なので, これは一つの任意定数). そこで, もう一つの任意定数を含む解を見つけなければならない. 詳しい説明は省くが,

$$x(t) = (C_1 + C_2 t) e^{\lambda t} \quad (C_1, C_2 \text{ は任意の定数}) \quad (7)$$

が常にうまくいくことが知られている. ここで, $\kappa^2 - \omega_0^2 = 0$ なので, $\lambda = -\kappa$ である.

3. $\kappa^2 - \omega_0^2 < 0$

このとき、平方根の中が負になるので、 λ_1, λ_2 は複素数となる。それでも恐れずに進もう。

$$\lambda_1 = -\kappa + i\sqrt{\omega_0^2 - \kappa^2}, \quad \lambda_2 = -\kappa - i\sqrt{\omega_0^2 - \kappa^2} \quad (8)$$

を、 $\omega_1 = \sqrt{\omega_0^2 - \kappa^2}$ と置き換え、

$$\lambda_1 = -\kappa + i\omega_1, \quad \lambda_2 = -\kappa - i\omega_1 \quad (9)$$

として先を続けると、

$$x(t) = e^{-\kappa t} (C_1 e^{i\omega_1 t} + C_2 e^{-i\omega_1 t}) \quad (C_1, C_2 \text{ は任意の定数}) \quad (10)$$

を得る。オイラーの公式を使えば、後半の部分は三角関数に書き換えることができ、

$$x(t) = e^{-\kappa t} \{A \cos(\omega_1 t) + B \sin(\omega_1 t)\} \quad (A, B \text{ は任意の定数}) \quad (11)$$

と書ける。 C_1, C_2 と A, B の関係を求めることは可能だが、これは不要だ。どうせ、 A, B は初期条件が与えられれば直接知ることができる。すなわち、 $\kappa^2 - \omega_0^2 < 0$ のとき、斉次形の一般解は指数関数と調和振動の和となり、これは減衰振動と呼ばれる。

次に、非斉次形の一般解を求める。これは、非斉次形の特殊解をひとつ見つけ、これを斉次形の一般解に足せばよい。例として、 $f(t) = \sin(\omega t)$ の場合を考える。ここで、 ω は任意の角振動数で、 ω_0 と、 $\omega_1 = \sqrt{\omega_0^2 - \kappa^2}$ ととも無関係に決められることに注意すべきである。

まず、 $f(t) = \sin \omega t$ なら、特殊解も角振動数 ω で振動する調和振動だろう、とアタリをつける。この「アタリ」は、何度か経験すればわかるようになる。ただし、振幅と位相は不明なので、解を

$$x(t) = \alpha \cos(\omega t) + \beta \sin(\omega t) \quad (\alpha, \beta \text{ はある定数}) \quad (12)$$

と置こう。微分方程式が $\frac{d^2 x}{dt^2} + 2\kappa \frac{dx}{dt} + \omega_0^2 x = f(t)$ を満足するということは、

$$(-\alpha\omega^2 + 2\kappa\beta\omega + \alpha\omega_0^2)\cos(\omega t) + (-\beta\omega^2 - 2\kappa\alpha\omega + \beta\omega_0^2)\sin(\omega t) = \sin(\omega t) \quad (13)$$

が満足されなければならない。したがって、

$$-\alpha\omega^2 + 2\kappa\beta\omega + \alpha\omega_0^2 = 0 \quad (14)$$

$$-\beta\omega^2 - 2\kappa\alpha\omega + \beta\omega_0^2 = 1 \quad (15)$$

が成り立ち、これは α, β についての連立方程式になる。解くと

$$\alpha = \frac{2\kappa\omega}{4\kappa^2\omega^2 - (\omega_0^2 - \omega^2)^2}, \quad \beta = \frac{\omega^2 - \omega_0^2}{4\kappa^2\omega^2 - (\omega_0^2 - \omega^2)^2} \quad (16)$$

を得る。したがって、微分方程式(1)の一般解は以下の通りである。

$$x(t) = e^{-\kappa t} \{A \cos(\omega_1 t) + B \sin(\omega_1 t)\} + \frac{2\kappa\omega \cos(\omega t)}{4\kappa^2\omega^2 - (\omega_0^2 - \omega^2)^2} + \frac{(\omega^2 - \omega_0^2) \sin(\omega t)}{4\kappa^2\omega^2 - (\omega_0^2 - \omega^2)^2} \quad (17)$$

(A, B は任意の定数)